「はい」「ええ」の使い分けに関する意識調査

金山　泰子・二宮　理佳

[要　旨]

本稿では、アンケート調査を通し、非母語話者と母語話者の「はい」「ええ」に関する認知・解釈、使用状況を比較した。アンケートの対象者は母語話者29名（うち日本語教師14名、一般日本人15名）、非母語話者15名である。

調査の結果、以下のような対比が浮かび上がってきた。①非母語話者は母語話者と比べ、主に待遇面に着目して「はい」「ええ」を使い分けている。②母語話者はもとより、非母語話者にも、「はい」と「ええ」を使い分けることにより話者間の距離をコントロールしようという意識のある人もいる。③非母語話者は母語話者に比べ、積極的な態度表明として「ええ」を使う認識は低い。④非母語話者は母語話者に比べ、「ええ」の使用頻度が低い。

さらに、これらの結果を踏まえ「ええ」の機能について再考察を試みた。その結果、「ええ」の機能・効果には予想以上の幅があり、特に母語話者には個々の認識にも顕著な違いがあることが明らかになった。

[キーワード]

「ええ」の認知・解釈　「ええ」の機能・効果　待遇面　情報の共有　話者間の距離

1．はじめに

言葉の使い分けは相手との関係を成立させるだけでなく、話者自身の立場をも決定づけると考えられる。阪本（2001）は、言葉遣いは「個性とアイデンティティーの表明」（36）であり、相手との関係を規定する「関係生成的な側面」（37）を持つと指摘している。

「はい」「ええ」もそのような表現の一つである。「はい」「ええ」はコミュニケーションにおいて極めて使用頻度の高い表現であり、日本語教科書においても初級段階で導入されている基本的表現である。しかし教科書においては、「はい」「ええ」は共に「yes」の意味であり、「ええ」は「はい」よりややくだけた表現であるといった程度にしか説明がなされていない(1)。また「はい」と「ええ」はその使い分けが微妙なために、誤用運用した場合に、聞き手に対して間違いであることが伝わりにくい。結果、他者との関係を作り出し、自己のアイデンティティーを表明する上で、不本意な自分を表現してしまう可能性もある。

したがって学習者が適切に使い分けるための効果的な指導を考察する必要がある。その足がかりとして、本稿ではアンケート調査を通して、非母語話者と母語話者の「はい」「ええ」に関する認知・解釈、使用状況を比較する。更に調査の結果に基づき、「ええ」の機能について再考する。

2．先行研究

北川（1977）は、「はい」の本質的な意味は「承諾・肯定」ではないとした上で、「はい」「え

え」の違いについて次のように定義している。「はい」は「相手の発話がこちらにはっきりと届いたということを敬意をもって表明する」(66) のに対し、「ええ」は「相手の言ったことに対して『自分もそのように思う』という自分の気持ちを表出する」(66)。北川はこの定義にもとづき、「自分もそう思う」と答えるのが不自然な場合には「ええ」で応答することはできないと説明している。

日向 (1997) は、北川の定義を「認知応答」(はい)、「同意応答」(ええ) と名づけ、さらなる考察を試みている。その中で、「はい」は「どうぞ」や「さあ」に通じる積極的な機能を果たし、談話場面の設立・維持に関与する一方で、「ええ」にはそのような機能はないとしている。また話者同士が同じ利害関係の立場にあり、談話場面を共有する場合や共通の現象を話題にしているときは、同意応答あるいは共鳴応答としての「ええ」が適切であるとし、一方、情報伝達文および絶対的な命令文への応答には「はい」が現れやすいと指摘する。また聞き手の気持ち・意向にそって依頼するような発話および質問文に対する応答としては、「はい」「ええ」「うん」が待遇的に使い分けられると述べている。

McGloin (1997) は北川・日向の研究を踏まえた上で、「はい」の機能を「談話・場面を進行させる」、「ええ」の機能を「参加・協調」と説明している (2)。

富樫 (2002) は、「はい」の本質を単なる情報獲得の標示としてではなく、情報処理を心的操作したということの標識として捉え、その機能を「提示された情報に対し、それに関連した半活性化情報が多数呼び出されたことを示す」(147) と定義している。

これらの先行研究を踏まえて、二宮・金山 (2006) は、「はい」「ええ」の機能と効果について以下のように整理した。

「はい」の機能と効果：

① 相手の情報を、敬意を持って受取ったというサインを示す。

② 情報提示の予告としてのサインとなりうる。

③ 話者同士が共有する情報に格差があり、「情報の提供者」・「受取り手」という関係を固定させる。結果、話者間に距離が生じ、改まり度が増す。

「ええ」の機能と効果：

① 相手に対する同意を示す。したがって先行文は、同意を示すのに充分な内容・意見を持った情報を伴うものでなければならない。

② 話者同士が情報を共有することにより話者間の距離を縮め、親近感・同等感を示す。

以上を踏まえて、二宮・金山 (2006) は、「ええ」の機能について次のように考察した。

共有の度合いが高いほど「ええ」の使用許容度は高まり、話者間の距離が近づいた結果として親近感・同等感を増すと思われる。さらに「ええ」の持つ「同意応答」という機能について以下のように考察を進めた。同意とは相手の発話内容の是非 (同意するか否か) を判断するプロセスを経て表出されるものだと考えられる。つまり「ええ」は話者の判断に基づく相手への意見を表明しており、単なる応答表現ではなく、主張が含まれた主体的な表現なのではないか。したがって、「はい」が自らの意見を伴わない受動的な表現であるのに対し、「ええ」は積極的に自己の主張を表明し、相手に対して自らを同等な立場に位置づけようとする表現と言えるのではないか。

では母語話者はこのような「はい」と「ええ」の違いをどのように認識し、使い分けを行っているのだろうか。また非母語話者はどのように意識しており、母語話者との間にどのような認識の違いが見られるのであろうか。それを確かめる方法として、本稿ではいくつかの例文をとりあげ、アンケート調査を行った。

3．調査

3－1．調査の方法

調査対象者に、11の会話例から「はい」「ええ」の適切さを○×△で記すもの、「はい」「ええ」を使った2つの会話例から話者の関係を推測するもの、「ええ」の使用頻度、「はい」「ええ」の使い分けに関係する要因について記述するよう求めた。

質問項目の選出にあたっては、二宮・金山（2006）の研究で分析した文例から主に用いた。なお、一例（例 8）は今回のアンケートのために新たに作成した。「はい」「ええ」の使い分けにおける認知・理解を明らかにするために、「はい」のみが使える文例と、「はい」「ええ」共に使用可能な文例を選んだ。アンケートはメールで依頼、または対面で記入を依頼した。対面の場合は、可能な範囲で聞き取りを行った。調査期間は、2006年8月から11月である。なお、アンケートは資料1を参照されたい(3)。また、アンケートの質問Ⅰの集計結果は資料3のグラフ、質問ⅡからⅣの集計結果は資料4の表を参照されたい。

3－2．調査対象者

日本語母語話者（以下母語話者）29名と日本語非母語話者（以下非母語話者）15名を対象に調査を行った。母語話者は、日本語教師経験者（以下日本語教師）が14名、日本語教師非経験者（以下日本人（一般））が15名であった。調査対象者の内訳については資料2を参照されたい(4)。

3－3．調査結果と考察

3－3－1：質問Ⅰ

質問Ⅰでは、あらかじめ状況を設定した11の会話例から「はい」「ええ」の適切さを○×△で記入するよう求めた。なお、アンケート実施の際に聞き取ったコメントも付記する。

例1　状況：旅行から帰ってきた夫が妻におみやげを渡すところの会話
　　夫：はい、おみやげ。
　　妻：ありがとう。

例1は先行文がない場合の例である。「はい」は先行文を必要とせず、情報を持たない相手に対して一方的に情報を提示することができるが、「ええ」は何らかの情報に対する応答として現れる。従って適切な回答は「はい」のみである。

日本語教師、日本人（一般）は全員「はい」を○とした。一方、非母語話者は80%（12名）

注が「はい」を○とし、20%（3名）が×とした。

また、日本語教師、日本人（一般）は全員「ええ」を×とした。非母語話者は66.7%（10名）が「ええ」を×とし、20%（3名）が△、13.3%（2名）が○とした。

先行文がない場合には「ええ」を使用できないということを母語話者は100%の割合で認識しているが、非母語話者おいては2割強の人は認識できていないことが見てとれる。

なお、この質問についての日本人（一般）から、「『はい』は相手を促す機能がある」、「『ええ』は相手が言ったことを肯定する。よってこの状況では絶対使わない」とのコメントがあった。

例2　状況：教室で先生が出席をとっている
　　先生：山田君。
　　山田：はい。

例2は先行文が呼びかけ語からのみ成り立つ場合の例である。呼びかけは「情報」と言えるほどの内容を伴っておらず、話者間の情報の共有はないため「ええ」は使用できない。よって適切な回答は「はい」のみである。

日本語教師、日本人（一般）は全員「はい」を○とし、「ええ」を×とした。非母語話者は93.3%（14名）が「はい」を○、6.7%（1名）が△と回答した。また全員が「ええ」を×と回答した。

呼びかけに対しての応答は「はい」でしかできないことを母語話者は100%の割合で認識しており、非母語話者においても9割強で認識できていることが見てとれる。

なお、この質問における「ええ」について、非母語話者から得られたコメントには、「『ええ』での返答は集中してない感じ、相槌みたいな感じ」というものがあった。また日本人（一般）からは「『ええ』は同意なので、出席をとられた時の返事に同意は必要ない」というコメントがあった。

例3-1　状況：大学を訪ねた訪問者が聞きたいことがあるので、事務室で事務員に声をかけるところの会話
　　訪問者：すみません。
　　事務員：はい。

例3-1も先行文が呼びかけ語からのみ成り立つ場合の例であるため、適切な回答は「はい」のみである。

日本語教師、日本人（一般）は全員「はい」を○とし、「ええ」を×とした。一方、非母語話者は93.3%（14名）が「はい」を○、6.7%（1名）が△と回答した。また73.3%（11名）が「ええ」を×とし、26.7%（4名）が△と回答した。

例2同様、呼びかけに対しての応答は「はい」でしかできないことを母語話者は100%の割合で認識しているが、非母語話者においては2割強の人は認識していないことが見てとれる。本アンケートの中での非母語話者の誤用率は、この項目が2番目に高かった。

日本人（一般）のコメントに「『ええ』は応諾の意味が強いので、単なる返答には不適当だと思われる」というものがあった。

例 3-2　状況：大学を訪ねた訪問者が聞きたいことがあるので、事務室で事務員に声をかけるところの会話

訪問者：すみません、ちょっと伺いたいんですが。

事務員：はい／ええ。

例 3-2 も先行文が呼びかけ語からのみ成り立つ場合の例であるが、呼びかけの後に「伺ってもいいか」という許可を求める部分がある。そのため、例 3-1 よりも話者間の情報の共有の度合いが高まり、「ええ」での応答も可能になると考えられる。従って「はい」と「ええ」共に適切だと考えられる。

日本語教師、日本人（一般）は全員「はい」を○とした。非母語話者は「はい」を○としたのは 86.7%（13 名）、△が 13.3%（2 名）だった。一方、「ええ」においては回答が分かれた。日本語教師では「ええ」を×としたのは 26.6%（4 名）、○△は共に 35.7%（5 名）だった。日本人（一般）で「ええ」を×としたのは 40%（6 名）、△としたのは 46.7%（7 名）、○としたのは 13.3%（2 名）だった。非母語話者では「ええ」を×としたのは 60%（9 名）、△としたのは 33.3%（5 名）、○としたのは 6.7%（1 名）だった。

例 2 同様、呼びかけに対しての応答は「はい」が基本であることを母語話者は 100%の割合で認識しているが、非母語話者においては 2 割弱の人がそう認識していないことが見てとれる。「ええ」については許容度が最も高いのは日本語教師で、最も低いのは非母語話者だった。母語話者においては、例 3-1 と比べ、「ええ」の許容度が上がっているのに対して、非母語話者にはあまり顕著な差は見られず、例 3-1 と比べ「ええ」の許容度が上がっている様子は現れていない。つまり、非母語話者には情報共有の度合いが例 3-1 と比べ上がっていることはあまり認識されていないのではないかと考えられる。

なお、この質問における「ええ」について、母語話者からは以下のコメントが得られた。「『ええ』での返答は偉そうである。」「『ええ』での返答は、何かをやりながら答えるときならありそうだ。」また、「『ええ』での応対は相手の質問に答える気があることを示す。」「『ええ』での返答は相手に話を続けることを促すのに対し、『はい』での返答はフォーマルすぎて、また話がそこで終わってしまう感じがする。」

例 4　状況：スポーツセンターで若いインストラクターが年配の利用者に使い方を説明している

若いインストラクター：このレバーを使うと、椅子の高さが調節できます。

年配の利用者：はい／ええ。

例 4 は一方から他方へ情報が伝達されるという状況の例である。二者間の情報の共有の度合い

は低いため、適切だと考えられる回答は「はい」である。また利用者の方が年配であるため、改まり度から考えると「ええ」も使えそうだが、「ええ」を使うと利用者はインストラクターから提示された情報を既に知っているということになり、説明される前から使い方がわかっているという印象が生じると考えられる。

日本語教師、日本人（一般）は全員「はい」を○とした。非母語話者は「はい」を○としたのは66.7%（10名）、△は13.3%（2名）、×は20%（3名）だった。一方、「ええ」に関しては回答が分かれた。日本語教師で「ええ」を×としたのは21.4%（3名）、△は35.7%（4名）、○は42.9%（6名）だった。日本人（一般）で「ええ」を×としたのは60%（9名）、△としたのは26.7%（4名）、○としたのは13.3%（2名）だった。非母語話者では「ええ」を×としたのは26.7%（4名）、△としたのは33.3%（5名）、○としたのは40%（6名）だった。

○の回答を見ると、母語話者が改まり度だけでなく、情報の共有という観点を考慮に入れて使い分けをしていることが分かる。これに対し、非母語話者は改まり度の認識に重きを置いており、情報面での認識は薄いのではないかと考えられる。しかし一方で「ええ」については、日本語教師と非母語話者の回答に似た傾向が見られ、どちらも○△で7割以上を占めている。これに対し、母語話者（一般）は「ええ」を×としたものが6割に昇っており、「ええ」の許容度が低い。

「ええ」について日本語教師からは以下のコメントがあった。「『そんなことまで言わなくてもわかっている』という感じがする。」「最初にいすの高さの調節方法を質問したのなら『はい』で返答しそうだが、いろいろな使用法を次から次へと説明されているなら『ええ』と答える。」また母語話者（一般）からは「『はい』は低姿勢で『ええ』は単なる相槌とのコメント」、「『ええ』は肯定なのでこの状況では使わない」、非母語話者からは「『はい』は元気よく言う感じ」、「『ええ』は年配から発されているのでOK」とのコメントがあった。

例5　状況：教師が学生に向かって注意している
　　教師：もっとしっかり勉強しなさい。
　　学生：はい。

例5は命令文の例である。「ええ」と使うと自分に向けられた命令に対し、「自分もそう思うと応答することになるため「ええ」は使用できず、適切な回答は「はい」である。

日本語教師、日本人（一般）は全員「はい」を○とした。非母語話者で「はい」を○としたのは93.3%（14名）、△は6.7%（1名）で、×はなかった。「ええ」については三者とも傾向が似ており、×と△の比率がそれぞれ約8割対2割となっており、○はなかった。命令文に対する応答は「はい」であるという認識は、非母語話者もほぼ出来ていると考えられる。ただし、学生対先生という待遇面の要因をもとに回答を導き出した可能性も考えられる。

日本語教師からのコメントで「ええ」での返答は「『ええ、僕もそう思っているんですけど』と続きそう」、というものがあった。また、「『ええ』を使うと、完全に納得しているのではなく、一応同意しているように見せるが、後に何か続きそう。例えば『ええ…。でも何で僕だけ？』」、『ええ』だと学生自身の意志が明確でない感じ」、非母語話者からは「『はい』での返答は絶対に勉強

する感じだが、『ええ』はしない感じ」とのコメントがあった。

例6　状況：映画館の窓口の従業員が客に上演時間の説明をしている
客：〇〇のレイトショーは何時からですか。
従業員：はい／ええ、８時からです。

先行文が疑問詞を伴う質問文で、聞き手に情報を求める場合の会話例である。日向（1979）は疑問詞を伴う質問文に同意応答の「ええ」で応じるのは一般的でないとしている。これは二宮・金山（2006）の考察によれば、「ええ」は情報を持たない発話に対する応答としては使えないからである。特に、「情報を提供することが職業的に求められる場合は『はい』による応答が自然である」（56）と考えられる。

日本語教師、日本人（一般）は全員「はい」を〇とした。一方非母語話者は〇が 80%（12 名）、×が 6.7%（1 名）、△が 13.3%（2 名）と回答が割れている。また「ええ」については日本語教師、日本人一般ともに〇はなく、日本語教師は×が 85.7%（12 名）、△が 14.3%（2 名）、日本人一般は×が 86.7%（13 名）、△が 13.3%（2 名）で、傾向が似ている。これに対し非母語話者は〇が 20%（3 名）、×が 73.3%（11 名）、△が 6.7%（1 名）となっている。

母語話者が疑問詞を伴う質問文に対して「はい」で応答するのが適切であるということを 100%認識しているのに対し、非母語話者においては 20%がそのように認識していないことが見てとれる。しかし、母語話者の中にも「ええ」を△とした解答が若干であるが見られることは、「はい」「ええ」の使い分けを認識することの難しさを物語っていると言えよう。

日本人（一般）から「『ええ』は同意のように聞こえるから不可」とのコメントがあった。

例 7-1　状況：客がデパートの店員に本屋の場所について聞いている。
客：本屋はこの階ですか。
従業員：はい、そうです／ええ、そうです

一般的に真偽疑問文に対する肯定応答としては、「はい」「ええ」「うん」が相手・場面などにより待遇的に使い分けられるとされている（日向 1979）。この例 7 においては、例 6 と同様、デパートの従業員と客という情報提供者と情報の受け取り手という役割が固定されており、また待遇面から考慮しても「はい」の適切さが増すと思われる。

日本語教師、日本人（一般）は全員「はい」を〇とした。一方非母語話者は〇が 86.6%（13 名）、×△がともに 6.7%（1 名）であった。「ええ」については、日本語教師は〇が 50%（7 名）、×が 14.3%（2 名）、△が 35.7%（5 名）、日本人（一般）は〇が 60%（9 名）で×は 13.3%（2 名）、△は 26.7%（4 名）で傾向が似ている。非母語話者は回答の傾向が異なり、80%（12 名）が×とし、〇は 13.3%（2 名）、△は 6.7%（1 名）であった。

真偽疑問文に対する応答としてこのように「ええ」の許容度にばらつきが見られるということは、母語話者・非母語話者を問わず、「ええ」の認識について個々の認識に差異があることを示唆

していると思われる。また「ええ」に対する許容度が一番高いのが日本人（一般）、許容度が一番低いのが非母語話者である。この点から非母語話者は主に「はい」「ええ」を改まり度の観点から判断していることが推測できる。

なお、日本語母語話者からは「『ええ』はえらそうだ」というコメントがあり、母語話者一般からは「『はい』はさわやかで、『ええ』は中年のイメージがある」とのコメントがあった。

非母語話者からは、「店の人はよく『はい』を使う」、「デパートの人は丁寧」というコメントがあった。

例 7-2　状況：デパートで客が通りがかりの他の客に本屋の場所について聞いている
客：本屋はこの階ですか。
客：はい、そうです／ええ、そうです

例 7-1 と同様の会話であるが、話者を客/従業員ではなく、客/客という同等のレベルに設定し、「ええ」の許容度が増すことを予測したものである。したがって「はい」「ええ」共に適切だと考えられる。

日本語教師は「はい」に○が 78.6%（11 名）、△が 21.4%（3 名）、日本人（一般）は○が 93.3%（14 名）、△が 6.7%（1 名）で、共に×の回答は見られなかった。非母語話者は○が 73.4%（11 名）、△が 13.3%（2 名）だが、母語話者と異なり×とした回答者が 13.3%（2 名）いた。「ええ」については、日本語教師は○が 92.9%（13 名）、△が 7.1%（1 名）、日本人一般は○が 86.7%（13 名）、△が 13.3%（2 名）で、共に×の回答は見られなかった。一方、非母語話者は○が 46.6%（7 名）、△が 26.7%（4 名）で、×が 26.7%（4 名）いたことも母語話者との間に違いが見られた。

母語話者は「はい」「ええ」どちらもほとんど可としているのに対し、非母語話者は「はい」を×とした回答が若干ではあるが見られ、さらに「ええ」を×とした回答も 2 割強いた。本アンケートの中での非母語話者の誤用率は、この項目が最も高かった。

非母語話者は例 7-1 のように上下がはっきりした関係では比較的容易に「はい」「ええ」の使い分けができるが、同等の立場間でどのように使うかという認識は明確になされていないのではないかということが推測される。

日本人（一般）からは、「『はい』は断定的だから△、そこまで言い切れない人もいるのでは」、「どちらを使うかは相手の年齢にもよる」、「『ええ』は肯定だから OK」、「立場的に同じだから、どちらでもいい」等のコメントがあった。

例 8　状況：中村と鈴木は大学勤務の同僚。研究室で、中村が先輩（＝田中）の書いた本を見つけ、鈴木にたずねる。
中村：田中先生、本をお書きになったんですね。
鈴木：はい／ええ

この質問は、今回のアンケートのために新たに作成したものであり、他人に関する情報についてたずねられた場合にどちらで応答するかを見ようとしたものである。

日本語教師は42.9%（6名）が「はい」に○、×が7.1%（1名）、△が50%（7名）、母語話者（一般）は○が86.6%（13名）、×△は共に6.7%（1名）であった。非母語話者は33.3%（5名）が「はい」に○、40%が×（6名）、26.7%（4名）が△となっている。「ええ」については日本語教師は85.7%（12名）が○、14.3%（2名）が△で×はなく、日本人（一般）は全員が○、非母語話者は80%（12名）が○、6.7%（1名）が×、13.3%（2名）が△としている。

三者とも「ええ」に○をつけたものが多かったことが特徴であるが、母語話者には「ええ」を×とする回答がなかったのに対し、非母語話者は1名のみ「ええ」を×としている。

日本語教師からの回答では、「『はい』『ええ』ともに使わず、『ああ、そうらしいですね』などのほうが適切」、「『はい』と答えると、まるで自分の本か身内が書いた本のように聞え、よほど距離の近い関係のようだ」、「『ええ』に続いて「『そうらしいですよ、よく知りませんが』といった表現が続きそう」などのコメントが得られた。母語話者（一般）からは「はい」を使っている方は男、「ええ」は女というコメントもあった。また非母語話者からは「『はい』と答えると、それで話が終わってしまうが、『ええ』だと話が続く感じがする」とのコメントがあった。

例9　状況：年配でベテランの社員が新入社員に向かって聞いている
　　ベテラン：田中さんのペン、お借りしてもいいですか。
　　新入社員：はい／ええ

待遇の観点から言えば、目上に対しては「はい」と答えるのが一般的である。しかし、目上が目下に対して「許可を求める」という場面においては、目下が「ええ」を使うことによって、「許可を求める／許可を与える」という関係を固定化せず、結果として親近感と丁寧さを生じる効果があるとも考えられる。したがって、「はい」「ええ」ともに可能だと考えられる。

日本語教師・日本人（一般）ともに全員「はい」に○としている。非母語話者は○が93.3%（14名）、△が6.7%（1名）で×はなかった。「ええ」については回答が割れ、日本語教師は○が71.4%（10名）、×△共に14.3%（2名）、日本人（一般）は○が33.3%（5名）、×が46.7%（7名）、△が20%（3名）、非母語話者は○が20%（3名）、×が60%（9名）、△が20%（3名）となっている。

三者とも「ええ」より「はい」を○とした方が多いが、これは会話の設定における目上目下の関係が明らかなことが要因となっていると推測される。しかし、「ええ」については認識に違いが見られる。許容度が最も高いのが日本語教師で、○とした回答が7割以上であるのに対し、最も低いのが非母語話者で×とした回答が6割である。たしかに目上・目下という観点だけで判断した場合、可能なものは「はい」のみだと考えられるが、「ええ」を使うことにより相手の距離を縮め、親近感や丁寧さを表明することもできる。日本語教師に「ええ」の許容度が高かったことは、このような「ええ」の効果を考慮に入れたものではないかと推測される。一方、非母語話者にはこのような「ええ」の効果については認識が薄いと考えられるのではないだろうか。

なお日本語教師のコメントには、「先輩でも距離の近い人なら『ええ』でも可」というものがあった。日本人（一般）からは、「新入社員は年配の人には『ええ』とは言わないし、若い人は『ええ』は言わない」、また「『ええ』も『はい』もニュアンスは同じ」とのコメントがあった。

３－３－２：質問Ⅱ

質問Ⅱは状況設定は行わず、「はい」「ええ」共に可能な会話例のみを提示し、「はい」が自然な場合、及び「ええ」が自然な場合の話者の関係を被験者自身が設定するよう求めた。なお複数回答を可とした。集計結果については資料３を参照されたい。

例 10　A：掃除は終りましたか。　　A：掃除は終りましたか。
　　B：はい。　　B：ええ。

①「はい」が自然である。この場合のＡとＢの関係は、
　ア）Ａ　目上　Ｂ　目下　　イ）Ａ　目下　Ｂ　目上　　ウ）Ａ、Ｂは同等

②「ええ」が自然である。この場合のＡとＢの関係は、
　ア）Ａ　目上　Ｂ　目下　　イ）Ａ　目下　Ｂ　目上　　ウ）Ａ、Ｂは同等

例 10 の質問は先行文が真偽疑問文の例である。真偽疑問文に対する肯定応答としては「はい」「ええ」（「うん」）のいずれも使え、相手・場面等により待遇的に使い分けられるとされる。

まず非母語話者においては、目上が目下に「はい」で応じるのを自然とする回答は皆無だった（0%）。一方、母語話者においては、アイウの３つの選択肢の中でそれぞれ一番低いにせよ、日本語教師は 14.3%、日本人（一般）は 35.7%は自然だとしていた。

また、非母語話者は目下が目上に「ええ」で応じるのを自然だとする回答も皆無であった（0%）。母語話者は、日本語教師は非母語話者同様、皆無だったが（0%）、日本人（一般）は 26.7%（アイウの３つの選択肢の中で一番低い）は自然だと答えていた。

以上の点より、非母語話者にとっては待遇面での要因が「はい」「ええ」の使い分けを決定する際の非常に大きな要因であることがわかる。

例 11　A：あれ、おいしそうですね。　　A：あれ、おいしそうですね。
　　B：はい。　　B：ええ。

①「はい」が自然である。この場合のＡとＢの関係は、
　ア）Ａ　目上　Ｂ　目下　　イ）Ａ　目下　Ｂ　目上　　ウ）Ａ、Ｂは同等

②「ええ」が自然である。この場合のＡとＢの関係は、
　ア）Ａ　目上　Ｂ　目下　　イ）Ａ　目下　Ｂ　目上　　ウ）Ａ、Ｂは同等

例 11 の質問は先行文が「ね」を伴う文（確認文・感嘆文）の例である。「ね」を伴う確認文・感嘆文を先行文とする場面では、ＡＢと共に情報を共有していることが前提となり「ええ」が現れやすい。

非母語話者は、目下が目上に「はい」で応じるのを自然だとする回答が非常に多かった（100%）。母語話者も、日本語教師は半数（50%）、日本人（一般）は 100%が自然だとしていた。なお、これらはアイウの３つの選択肢の中でそれぞれ一番高い。

また、非母語話者は目上が目下に「はい」で応じるのを自然とする回答は皆無だった（0%）。母語話者においては、日本語教師は非母語話者同様、皆無（0%）だったが、日本人（一般）は 26.7%（アイウの３つの選択肢の中で一番低い）は自然だとしていた。

非母語話者は、目下が目上に「ええ」で応じるのを自然とする回答はわずか１名（6.7%）であった。それに対して、母語話者では日本語教師は半数（50%）、日本人（一般）は 33.3%（アイウの３つの選択肢の中で一番低い）が自然だとしていた。

また、非母語話者は、目上が目下に「ええ」で応じるのを自然だとする回答が多かった（80%）。しかし、母語話者においては日本語教師は 40%（アイウの３つの選択肢の中で一番低い）、日本人（一般）は 60%（アイウの３つの選択肢の中で真ん中）が自然だと回答していた。

また、ヒアリングから得られたコメントには、「『はい』での応答は事務的」、「基本的には『ええ』は目下から目上には適切ではない気がするが、同意する場合は比較的許容できる気がする」等が日本語教師からあった。

以上のような結果から以下のことが言えるであろう。

非母語話者は、目下から目上なら「はい」で応じるのが最も自然であると考えているようである。同意・確認を求められた場合であっても、目下から目上に「ええ」で応じるのは望ましくないと捉えていると考えられる。従って、例 11 においてもやはり待遇面での要因が「はい」「ええ」の使い分けに大きく関係している様子が見て取れる。一方、母語話者においては、目下から目上でも同意を求められた場合には「ええ」での応答を自然とする回答は少なくない点、また日本語教師、日本人（一般）共にＡとＢの関係を同等とする回答が３つの選択肢の中で最も多かった点から、母語話者は「ね」を伴う先行文の応答としては目上目下を問わず「ええ」が現れやすいことを認識していることが読み取れる。

なお、例 10 においては、目下から目上に「掃除は終わりましたか」というような質問はしないのではないかというコメントや「掃除は終わられましたでしょうか」なら自然だというコメントがあった。今後は、目下から目上、目上から目下、同等同士いずれの場合も可能であるような文例をさらに厳選する必要がある。

３－３－３：質問Ⅲ

質問Ⅲは「ええ」を使用する頻度を尋ねた。日本語教師は、「よく」が 28.6%（４名）、「ときどき」が 42.9%（６名）、「めったに」が 21.4%（３名）、「ぜんぜん」が 0、「わからない」が 7.1%（１名）だった。

日本人（一般）は「よく」が 6.7%（１名）、「ときどき」が 53.3%（８名）、「めったに」が 20%（３名）、「ぜんぜん」が 20%（３名）、「わからない」は０だった。

非母語話者は「よく」が 6.7%（１名）、「ときどき」が 40%（６名）、「めったに」が 33.3%（５名）、「ぜんぜん」が 20%（３名）、「わからない」が０だった。

「よく」と答えたのが最多だったのは、日本語教師で３割近く、日本人（一般）・非母語話者はそれぞれ１名のみだった。また、「よく」と「ときどき」を合わせると日本語教師は７割以上にのぼり、日本人（一般）は６割、非母語話者は５割弱になる。非母語話者は「めったに」「ぜんぜん」を合わせた結果が５割を超え、全体的に母語話者より「ええ」の使用頻度が低いことがわかる。なお、「ええ」の使用頻度が最も高かったのは日本語教師であったが、これは女性の比率が高かったこと（14 人中 13 人）ということに起因している可能性も考えられる。

３－３－４：質問Ⅳ

質問Ⅳは「ええ」をどのような要因によって使い分けているかについて尋ねた。「相手との関係」「場面・場所・状況」「話題」「自分の気持ち」「性別」という項目を設け、○をつけるよう求めた。なお複数回答を可とした。「相手との関係」と回答したのは、日本語教師が 64.3%（9 名）、日本人（一般）が 60%（9 名）、非母語話者は 86.7%（13 名）だった。「場所・場面・状況」と回答したのは日本語教師が 71.4%（10 名）、日本人（一般）は 46.7%（7 名）、非母語話者は 73.3%（11 名）だった。「話題」と回答したのは日本語教師は 28.6%（4 名）、日本人（一般）は 13.3%（2 名）、非母語話者は 20%（3 名）だった。「自分の気持ち」と回答したのは日本語教師は 35.7%（5 名）、日本人（一般）は 46.7%（7 名）、非母語話者は 20%（3 名）だった。「性別」と回答したのは、日本語教師は 14.3%（2 名）、日本人（一般）は 6.7%（1 名）、非母語話者は 13.3%（2 名）だった。さらに「わからない」との回答が日本語教師は 7.1%（1 名）、日本人（一般）は 20%（3 名）であった。

非母語話者は特に「相手との関係」を意識している（8 割強）ことがわかる。日本語教師と日本人（一般）は「場所・場面・状況」が最も多く、次いで「相手との関係」となっている。また「自分の気持ち」を最も強く意識しているのは日本人（一般）で５割近くにのぼった。

３－３－５：質問Ⅴ

質問Ⅴでは、質問Ⅳで○をつけた項目について、どのように使い分けをしているかを記述するよう求めた。なお上記の項目に分類しきれないコメントについては、「イメージ」「その他」という項目を新たに設けた。コメントは主に記述によるものだが、可能な場合はヒアリングを行った。ヒアリングを行った対象者は、日本人（一般）５名、日本語教師５名、非母語話者１名である。コメントは多岐にわたり数も多いため、箇条書きにして以下の表１に示す。

表１　「はい」「ええ」をどのように使い分けているか

項目	対象者の分類	コメント
相手との関係	日本語教師	目上および親しくない人、仕事関係の人に対しては「はい」を使う。
		年上でも親しい人には「ええ」を使う。
		年齢的には上だが立場的には同等または距離が近い人に「ええ」を使っていいか困る。
		自分が把握している社会関係や外見から推測される年齢差に基づいて使い分ける。

		目上・目下・親疎で「はい」「ええ」を使い分ける。
	日本人（一般）	年上・気を使わなくてはいけない相手には「はい」。
		同等・目下・気を使わなくてもいい相手には「ええ」。
		「ええ」は目下に対して威圧的な態度に出る時に使う。
		「ええ」は後輩に対して冗談の中で相手の言うことを肯定する時に使う。
	非母語話者	上司・先生・年上・年配者・客・仕事関係の人とは「ええ」を使わないようにする。
		意地悪な先生には特に意識して「はい」を使う。
		「ええ」は消極的で相手を軽蔑する感じがあるので年上には使わないようにする。
場面場所状況	日本語教師	真偽疑問文に対する答えは「はい」。
		公的場面では「ええ」は適切でないと思いながらも時々使ってしまう。
		目上には「ええ」は不適切な場合があるが、実際に適切に使い分けているかは疑問。
		改まった状況では「はい」、カジュアルな設定では「ええ」を使う。
		教師から学生に明確に答える時、免許の書き換え・店員として働いている時は「はい」。
		公的場面・内容、呼びかけに対する答えは「はい」。
		「はい」は答えとしてはっきりしすぎて変な時もある。
		「はい」ばかりだと機械的だ。
		インフォーマルな場でも喧嘩や不承不承の承諾など親しみを表したくない時は「はい」
		相手との距離をとりたい時は「はい」を使う。
		「ええ」はインタビュー等の状況設定、上品さ・丁寧さを表現したい時等に使う。
		何度も相槌を打つときは「はい」より「ええ」。
		「ええ」は東京でよく聞かれる。
		「ええ」は軽く相槌を打つときにしか使わない。
	日本人（一般）	公の場、例えば会議や仕事などでは「はい」を使うことが多い。
		電話では「ええ」が多くなる。
	非母語話者	「はい」は職場での応答・電話での応答・呼ばれた時・フォーマルな時に使う。
		クラスの話し合い等で相手の言ったことを理解したと示す時や同意する時は「はい」。
		相手の話が信じられない、確認したい時に「ええ」、同意・賛成する時は「はい」。
		クラスの話し合いでは「ええ」を使い、聞いていることを表す。
		「ええ」は議論で驚きや同意を表す。
話題	日本語教師	「ええ」は固いトピックの時は変である。
		相談・打ち明け・事情説明等プライバシーが関わると親しい関係でなくても「ええ」。
	日本人（一般）	特に親密に話を聞く時は目上・目下に関わらず「ええ」を使う。
	非母語話者	目下・同僚の間で軽い話題やプライバシーに関する話題で話すときは「ええ」を使う。

		分からない或いはよく知らない話題には「ええ」を使う。
自分の気持ち	日本語教師	自分の感情や実感をこめて同意する場合は「ええ」を使うことが多いような気がする。
		その場の雰囲気や話題に応じて「ええ」を使っているかもしれない。
		相手に対する同調や親しみを表すとき「ええ」が多い。
		「はい」と「ええ」は自分では意識せずに使い分けをしている。
		「はい」と「ええ」は内省した時に初めて色々な要因で使い分けていることに気づく。
	日本人（一般）	同意する時や目上に対して同調する時に「ええ」を使う。
		「はい」のみは完全に ok と解釈されがちな為、納得できない時は「ええ」を使う。
		相手は正しいと思いつつ、認めたくない時は「ええ」を使う。
		納得できない時に返事をしなければならない状況で「ええ」を使うことがある。
		「ええ」は「ええ。もちろん」「ええ、当たり前」という気持ちを表明する。
	非母語話者	肯定する場合は「はい」、それ以外は「ええ」を使う。
		自分の気持ちがあまりはっきりしない場合は「ええ」を使う。
		あまり元気がない時は「ええ」を使う。
性別	日本語教師	女性から男性に「はい」を多く使うと「従」のイメージがあるので、「ええ」を混ぜる。
	日本人（一般）	コメントなし
	非母語話者	女性はできるだけ「はい」を使う
		女性に対しては「ええ」を使う（男性からのコメント）
イメージ	日本語教師	「ええ」のほうがソフトな感じ、気取っている感じ、自分を装っている感じがある。
		「ええ」は上品で控えめ。「いいところの奥さん」というイメージがある。
	日本人（一般）	意識して使い分けていないが、「ええ」の方がやわらかいイメージがある。
		「ええ」はお嬢様のイメージがある。
	非母語話者	コメントなし
その他	日本語教師	「ええ」は双方とも既知の情報について話している時に使うような気がする。
		「ええ」は全面的な yes ではなく、何も言わないわけにはいかないからとりあえず使う。
		「ええ」での返答は、話を続けることを促すサインである。
		相槌が「はい」のみだと「続けて」のサインがない為話が終わってしまう感じで変。
		「はい」ばかりだとちゃんと聞いている印象が薄くなると思い、「ええ」も混ぜる。
		自分が「ええ」を使っているかどうかわからない。
	日本人（一般）	相槌を打つ時「はい」「ええ」と織り交ぜる。
		客観的なニュアンスを含めたいとき、「ええ」を使う。
		学生は教えてもらう立場だから「ええ」を使わない。
		小学校の生徒には「返事は『はい』」と指導している。（小学校教師）

		ある程度の年齢から職場での地位が上がり、意識的に「ええ」を使うようになった。
		ある程度の年齢に達してからでないと「ええ」は使えない。
	非母語話者	「ええ」は相槌として使う場合がある。
		「はい」ばかりだと話をちゃんと聞いているか不信感を与えるため「ええ」をはさむ。

4．まとめ

質問ＩからＶの結果を踏まえて、まず非母語話者と母語話者の「はい」「ええ」に関する認知・解釈、使用状況を比較する。更に調査の結果に基づき、「ええ」の機能について再考する。対象者の数が限られており、またコメントが多岐に渡っているため一般化することは避けねばならないが、回答の結果から全体的な傾向の一端を探りたい。

４－１：母語話者と非母語話者の比較

今回の調査から、「はい」と「ええ」の使い分けについて母語話者と非母語話者の間に以下のような対比が浮かび上がってきた。

① 母語話者・非母語話者ともに、目上/目下、親疎、フォーマルな場面/インフォーマルな場面に応じて「はい」「ええ」を使い分けているという認識は高い。しかし、非母語話者が主に待遇の面において使い分けているのに対し、母語話者はその他の要因にも幅広く意識が及んでいるようだ。すなわち非母語話者は母語話者に比べ、待遇面以外の要因が少ないと考えられる。例えば話者間の情報の共有という観点について、非母語話者は意識が薄く、そのために先行文のない場合（例１）や呼びかけに対する応答（例 2、例 3）に「ええ」を使ってしまうという誤用がいくつか見られた。

② 母語話者からインフォーマルな場でも親しみを表したくない時は「はい」を使うというコメント、非母語話者からは意地悪な先生には「はい」を使うというコメントがあった。これらのコメントからは使い分けの意識が、フォーマルな場では「はい」、インフォーマルな場では「ええ」という基本的なレベル以上にまで及んでいることがわかる。母語話者はもとより、非母語話者にも「はい」「ええ」の使い分けにより、話者間の距離を意識的にコントロールしようとする意識がある人もいることがわかった。

③ 非母語話者の「ええ」の使い方に関するコメントを見ると、「わからない、話題をよく知らない時」、「元気がない時」、「自分の気持ちがはっきりしない時」、「相手にちゃんと聞いているか不信感を与えないように」等があり、「ええ」が肯定以外の意味を持つという認識があることが窺える。しかしながら、母語話者の「『ええ』は全面的な yes ではなく、納得できない時に使う」、「『ええ』で同調する姿勢を見せつつ、それ以外にも言いたいことがある」等のコメントに比べると、積極的な態度の表明として「ええ」を使う意識はあまりないようだ。

④ 母語話者に比べて非母語話者は「ええ」の使用頻度が低い。これは非母語話者が「ええ」の機能・効果・イメージ等について認識や理解が明確にはなされていないことに起因しているかもしれない。

４－２：「ええ」の機能についての再考察

本調査の結果から明らかになったことは、「ええ」にはかなりの幅があり、個々の意識によってその使い方・捉え方が異なるということである。二宮・金山（2006）は「ええ」の機能と効果の一つとして「話者同士は情報を共有することにより、話者間の距離を縮め、親近感・同等感を示す」（59）と捉えた上で「故に不適切に『ええ』を使えば、親近感・同等感を超えて相手に失礼な印象を与えることにもなりかねない危険性を孕んでいる」（60）と述べた。つまり使い方によってネガティブにもポジティブにもなり得る可能性を示唆したのだが、調査から得たコメントの中にも「ええ」は「威圧的」「気取っている」「自分を装っている感じ」といった否定的なイメージもあれば、「お嬢様」「いいところの奥様」「上品で控えめ」「丁寧」「やわらかい」といった肯定的なイメージもあり、個々によって捉え方が異なることがわかった。「ええ」によって縮められた距離が受け取り手によって快くもあれば不快にもなり得るということだ。使い分けに幅があるということは、受け取り方にも幅があるということである。つまり、話者と聞き手の間で「ええ」に対する意識やイメージが異なれば、話者の意図するところとは違う意味が伝わったり、また不本意な自己表明となることもあるのではないか。

また、二宮・金山（2006）は「『はい』が自らの意見を伴わない受動的な表現であるのに対し、『ええ』は積極的に自己の考え・スタンス・主張を前面に押し出すといえるのではないか」と指摘した。今回の母語話者のコメントの中に「全面的に相手の言ったことを認めたくないときやyesと言いたくないときに『ええ』を使う」、「納得できない時に返事をしなければならない状況で『ええ』を使う」というものがあったが、これは「ええ」の中に自分なりの主張を込めたものと考えられる。一方で「ええ」を使うことにより「実感をこめて相手に同意する」というコメントもあれば、「何も言わないわけにはいかないのでとりあえず聞いているサイン」として「ええ」を使うというコメント、さらには「『ええ』は『話を続けて』というサインである」というコメントもあり、「ええ」の使い方の幅の広さを感じさせる。このように母語話者の中には、「ええ」は「yes」以外のものを含む、または「ええ」は完全に「yes」ではないという意識の下に使い分けている人もいることがわかった。

このような幅広さは、何を「ええ」と「はい」の使い分けの決定要因にするかに起因していると思われる。人によって、または状況によって、待遇や丁寧さや改まり度に意識を置くか、相手との関係を意識するか、話者の気持ちの表明を重視するか等々が異なるため、使い方・受け取り方に幅が出てくるのではないだろうか。

今回の調査の結果からは、「はい」と「ええ」の使い分けについて一般化することはできないが、「ええ」の機能や効果に予想以上の幅があり、特に母語話者には個々の認識にも大きな違いがあることが明らかになった。

５．おわりに

以上、アンケート調査を通じて、母語話者と非母語話者の「はい」「ええ」の使い分けに関する意識について考察を試みた。アンケートの結果から、母語話者と非母語話者の意識の違いの一端をうかがい知ることはできたが、今回は対象者の数も限られており、今後もさらなる調査が必要

と思われる。以下に、反省を踏まえて今後の課題についてまとめる。

① 今回は非母語話者の学習歴・日本語のレベルが統一されていなかったので、今後、さらにレベル別の調査を行い、レベルごとの習得状況、認識度の比較を試みたい。
② 今回は聞き取り調査を全員に行うことができなかったため、今後は、より多くの対象者にヒアリングを行い、実態や意識をさらに明らかにしたい。
③ 性差・地域差・職業・年代差等を視野に入れた研究も課題の一つとしたい。
④ 今回新たに作成した例8について少し触れておきたい。これは、実際に遭遇した談話をもとに作成したもので、他人の情報について尋ねられた場合にどう返答するかを見るために設定した作例である。結果は、全体として「ええ」を○としたものが多く、「自分がよく知らないことに対しては『ええ』を使うほうがいい」というコメントが複数見られた。この点については、筆者らが指摘した情報の共有という観点では把握しきれない点があると考えられる。したがって、新たな情報の視点からあらためて考察することを今後の課題としたい。
⑤ 非母語話者は、話者間の情報の共有という観点については意識があまり高くなく、そのため先行文のない場合や呼びかけに対する応答に「ええ」を使う誤用が見られた。初級教科書では「ええ」は「yes」の意味であり、「はい」よりややくだけた表現であるという説明しかなされていないことが原因の一つと考えられるかもしれない。また、呼びかけや疑問詞を伴う質問文、先行文の無い場合は「はい」で応答するという基本的な用法について現場において留意すべきだと考えられる。

注

(1)「文化初級日本語」「みんなの日本語」「げんき」「ようこそ」「ICUの日本語初級」「Situational Functional Japanese」「Japanese for Busy People」

(2) 原文では、McGloin (1997) は北川・日向の研究を踏まえた上で、「はい」の機能を“making the next move in an interaction”(14)(談話・場面を進行させる)、「ええ」の機能を“participant alignment”(14)(参加・協調)と説明している。なお、日本語訳は筆者による。

(3) 資料1は母語話者用のアンケートである。非母語話者用のアンケートでは、方言に関する質問は取り、母国語、日本語学習歴、日本滞在歴、両親が日本語を話すか、仕事で日本語を使っているかの項目を設けた。

(4) 性別・地域・職業・年代の情報も収集したが、本稿では分析の対象としない。今後の研究課題としたい。

参考文献

北川千里 (1977)「『はい』と『えゝ』」『日本語教育』33号 pp.65-72 日本語教育学会

阪本俊夫 (2001)「現代の社会関係と敬語の可能性」『月刊言語』11月 pp.34-42 大修館

富樫純一 (2002)「『はい』と『うん』の関係をめぐって」定信利之編『「うん」と「そう」の言語学』pp.127-157 ひつじ書房

日向茂男 (1979)「談話における『はい』と『ええ』の機能について」『国立国語研究所報告』65号 pp.215-229

国立国語研究所
国際基督教大学（1996）『ICU の日本語初級』講談社インターナショナル
スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語』スリーエーネットワーク
二宮理佳・金山泰子（2006）「『ええ』の機能についての一考察―『はい』との比較を通して―」「ICU 日本語教育研究２」pp.51-63　国際基督教大学日本語教育研究センター
文化学国語専門学校編（1987）『文化初級日本語』凡人社

Association for Japanese-Language Teaching（1996）*Japanese for Busy People*
Banno Eri, Ohno Yutaka, Sakane Yoko and Shinagawa Chikako（1996）*げんき An Integrated Course in Elementary Japanese* The Japan Times
McGloin, Naomi H.（1991）Hai and Ee : An Interactional Analysis. *Japanese/Korean Linguistics.* Vol.7
Tohsaku Yasu-Hiko（1994）*ようこそ An Invitation to Contemporary Japanese*
Tsukuba Language Group（1995）*Situational Functional Japanese* Bonjinsya Kodansha International

資料1

「はい」と「ええ」についてのアンケート

国際基督教大学　日本語教育課程
金山泰子　二宮理佳

私達は、日本語の「はい」と「ええ」について研究しています。「はい」「ええ」は一般的に、質問に対する答えとして使われますが、あいづちとしても使われています。今回は日本語母語話者がどのようにこの 2 つの表現の違いを認識しているかを探るため、このアンケートをお願いすることにしました。どうぞよろしくお願い申し上げます。個人情報については責任を持って管理致します。まず、以下の質問にお答えください。

●年齢 _____　●性別　男　女　●職業 _____
●出生地 _____　●育った場所（例：千葉県船橋市）_____
●ご両親は方言を話されますか。　はい　いいえ
●上の質問で「はい」とお答えになった方にお聞きします。それはどちらの方言ですか。_____
●現在同居なさっている方は、方言を話されますか。　はい　いいえ
●上の質問で「はい」とお答えになった方にお聞きします。それはどちらの方言ですか。（例　夫：福島弁）

Ⅰ．以下は、同じ状況で「はい」を使う例と「ええ」を使う例を示したものです。自然なものには○、不自然または変だと思われるものには×、条件によっては可能と思われるものは△を（　）にご記入ください。
＊尚、「はい」も「ええ」も驚き等を表すものではなく、平坦なイントネーションのものしか対象にしていません。

例1　状況：旅行から帰ってきた夫が妻におみやげを渡すところの会話

（　）A：はい、おみやげ。
B：ありがとう。

（　）A：ええ、おみやげ。
B：ありがとう。

例2　状況：教室で先生が出席をとっている

（　）先生：山田君。
山田：はい。

（　）先生：山田君。
山田：ええ。

例3-1　状況：大学を訪ねた訪問者が聞きたいことがあるので、事務室で事務員に声をかけるところの会話

（　）訪問者：すみません。
事務員：はい。

（　）訪問者：すみません。
事務員：ええ。

例3-2　状況：大学を訪ねた訪問者が聞きたいことがあるので、事務室で事務員に声をかけるところの会話

（　）訪問者：すみません、ちょっと伺いたいんですが。
事務員：はい。

（　）訪問者：すみません、ちょっと伺いたいんですが。
事務員：ええ。

例４　状況：スポーツセンターで若いインストラクターが年配の利用者に使い方を説明している

（　　）若いインストラクター：このレバーを使うと、椅子の高さが調節できます。
年配の利用者：はい。

（　　）若いインストラクター：このレバーを使うと、椅子の高さが調節できます。
年配の利用者：ええ。

例５　状況：教師が学生に向かって注意している

（　　）教師：もっとしっかり勉強しなさい。
学生：はい。

（　　）教師：もっとしっかり勉強しなさい。
学生：ええ。

例６　状況：映画館の窓口の従業員が客に上演時間の説明をしている

（　　）客：○○の late show は何時からですか？
従業員：はい、８時からです。

（　　）客：○○の late show は何時からですか？
従業員：ええ、８時からです。

例 7-1　状況：客がデパートの従業員に本屋の場所について聞いている

（　　）客：本屋はこの階ですか。
従業員：はい、そうです。

（　　）客：本屋はこの階ですか。
従業員：ええ、そうです。

例 7-2　状況：デパートで客が通りがかりの他の客に本屋の場所について聞いている

（　　）客：本屋はこの階ですか。
客：はい、そうです。

（　　）客：本屋はこの階ですか。
客：ええ、そうです。

例８　状況：中村と鈴木は大学勤務の同僚。研究室で、中村が先輩（＝田中）の書いた本を見つけ、鈴木にたずねる

（　　）中村：田中先生、本をお書きになったんですね。
鈴木：はい。

（　　）中村：田中先生、本をお書きになったんですね。
鈴木：ええ。

例９　状況：年配でベテランの社員が新入社員に向かって聞いている

（　　）　年配でベテランの社員：田中さんのペン、お借りしてもいいですか。
新入社員の田中：はい。

（　　）　年配でベテランの社員：田中さんのペン、お借りしてもいいですか。
新入社員の田中：ええ。

Ⅱ．次の会話は「はい」、「ええ」どちらも可能です。「はい」が自然な場合、「ええ」が自然な場合、Ａ と Ｂ の関係はどのようなものか、ア、イ、ウの中から選んで○をつけてください。１つ以上に○をつけることも可能です。

例 10　Ａ：掃除は終りましたか。
Ｂ：はい。

Ａ：掃除は終りましたか。
Ｂ：ええ。

①「はい」が自然である。この場合のＡとＢの関係は、

ア）Ａ　目上　　Ｂ　目下　　イ）Ａ　目下　　Ｂ　目上　　ウ）Ａ、Ｂは同等

②「ええ」が自然である。この場合のＡとＢの関係は、

ア）Ａ　目上　　Ｂ　目下　　イ）Ａ　目下　　Ｂ　目上　　ウ）Ａ、Ｂは同等

例 11　Ａ：あれ、おいしそうですね。
Ｂ：はい。（　　）

Ａ：あれ、おいしそうですね。
Ｂ：ええ。（　　）

①「はい」が自然である。この場合のＡとＢの関係は、

ア）Ａ　目上　　Ｂ　目下　　イ）Ａ　目下　　Ｂ　目上　　ウ）Ａ、Ｂは同等

②「ええ」が自然である。この場合のＡとＢの関係は、

ア）Ａ　目上　　Ｂ　目下　　イ）Ａ　目下　　Ｂ　目上　　ウ）Ａ、Ｂは同等

Ⅲ．あなたは「ええ」という表現をよく使いますか。適当なものに○をつけてください。

（　　）よく使う　　（　　）時々使う　　（　　）めったに使わない　　（　　）全く使わない

Ⅳ. あなたは「はい」と「ええ」をどのように使い分けていますか。当てはまるものに○をつけてください。複数に○をつけても結構です。　＊尚、Ⅲで「全く使わない」に○をつけた方はこの項目はとばしてⅤに進んでください。

ア）相手との関係　（年齢　親疎　社会的な上下関係　など）
イ）場所・場面や状況
ウ）話題
エ）自分の気持ち
オ）性別

Ⅴ. 上の質問で○をつけた項目について、どのように使い分けているか、具体的にご説明ください。
例）　ア）に○をつけた場合：目上の人にはできるだけ「はい」を使わないようにしている。
＊尚、Ⅲで「めったに使わない」「全く使わない」に○をつけた方も、「ええ」を使う人はどんな印象があるか、（「はい」に比べて）「ええ」にはどんなニュアンスがあるか等について考えてみてください。

☆ご協力ありがとうございました。☆

資料２　調査対象者の内訳

調査対象者（非母語話者）１５名の内訳

年齢	・２０代　３名　・３０代　１１名　・４０代　１名
性別	・男　７名　・女　８名
出生地	・中国　１２名　・香港　２名　・オーストラリア　１名
母国語	・中国語　１２名　・広東語　２名　・英語　１名
職業	・会社経営　１名　・公務員　１名　・翻訳・通訳　２名 ・学生　１名　・会社員　６名　・営業　１名　・ＩＴ関連　１名 ・システムエンジニア　１名　・ソフトウェアエンジニア　１名
学習歴	・１～２年　２名　・３～５年　７名　・５～１０年　２名 ・１０年以上　２名　・不明　２名
日本滞在歴	・０～１年　２名　・１～２年　６名　・３～５年　１名 ・５～１０年　５名　・１０年以上　１名
職場での日本語使用の有無	・有　１１名　・無　４名
両親が日本語を話すか	・話す　０名　・話さない　１５名

調査対象者（一般母語話者）１５名の内訳

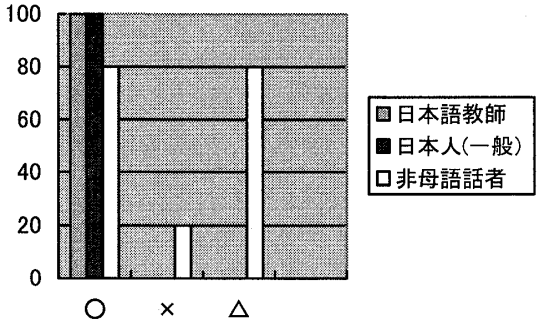
年齢	・２０代　６名　・３０代　４名　・４０代　３名　・５０代　０名 ・６０代　０名　・７０代　２名
性別	・男　５名　・女　１０名
出生地	・東京　３名　・千葉　２名　・新潟　１名　・岡山　１名 ・福島　１名　・静岡　１名　・神奈川　１名　・栃木　１名 ・長崎　１名　・京都　１名　・愛媛　１名　・岐阜　１名
育った場所	・神奈川　３名　・東京　３名　・新潟　１名　・岡山　１名 ・福島　１名　・静岡　１名　・栃木　１名　・長崎　１名 ・千葉　１名　・愛媛　１名　・岐阜　１名
職業	・設計　５名　・会社員　４名　・マーク加工業　１名 ・医療系　１名　・主婦　１名　・教員　１名 ・大学職員　１名　・言語聴覚士　１名
両親が方言を話すか	・話す　７名　・話さない　８名 ＜方言の地域＞ 上越地方　長崎　岡山　福島　関西　愛媛　岐阜
同居者が方言を話すか	・話す　２名　・話さない　９名　・同居者無し　４名 ＜方言の地域＞ 関西　愛媛

調査対象者（日本語教師）１４名の内訳

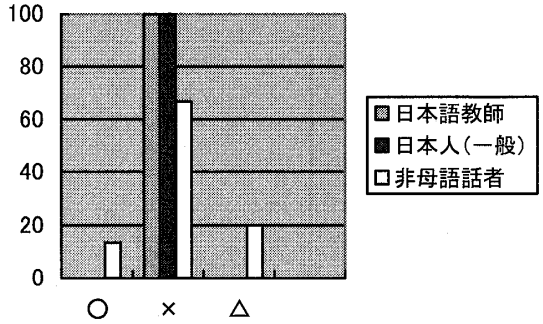
年齢	２０代　２名　・３０代　３名　・４０代　３名　・５０代　５名 ６０代　１名
性別	男　１名　・女　１３名
出生地	・東京　４名　・山梨　１名　・埼玉　１名　・長崎　１名 ・富山　１名　・宮城　１名　・愛媛　２名　・福岡　１名 ・北海道　１名　・愛知　１名
育った場所	・東京　２名　・山梨　１名　・埼玉　１名　・神奈川　１名 ・長崎　１名　・大阪　１名　・宮城　１名　・福岡　１名 ・愛知　１名 その他　１名（北海道から大阪） １名（富山　足利　沼津　和歌山を転々） １名（京都　愛媛　静岡　山口を転々）
両親が方言を話すか	・話す　１０名　・話さない　４名 ＜方言の地域＞ 山梨　山形　長崎　富山　宮城　愛媛　福岡　北海道　奈良
同居者が方言を話すか	・話す　８名　・話さない　４名　・同居人無し　２名 ＜方言の地域＞ 福岡　栃木　山形　大阪　愛媛　愛知

資料３　質問Ｉの集計結果

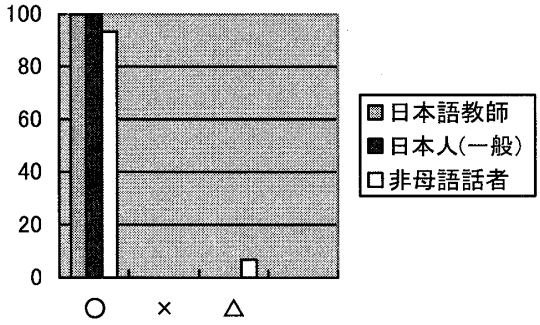
例１（お土産を渡す）「はい」



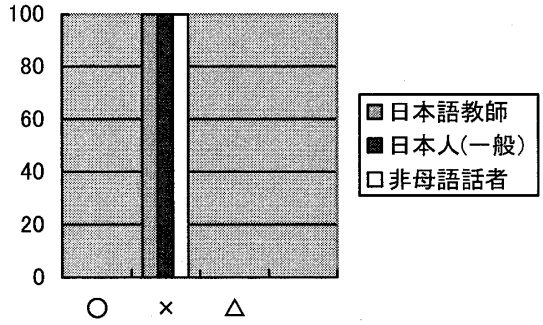
例１（お土産を渡す）「ええ」



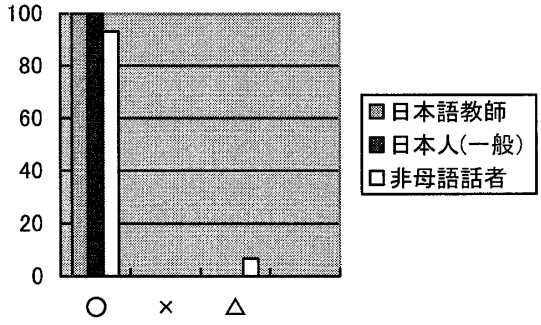
例２（出席をとる）「はい」



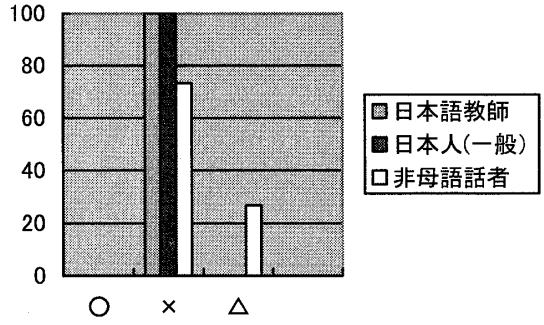
例２（出席をとる）「はい」



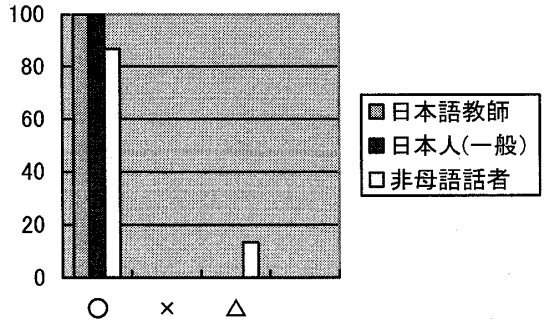
例３－１（問いかけ）「はい」



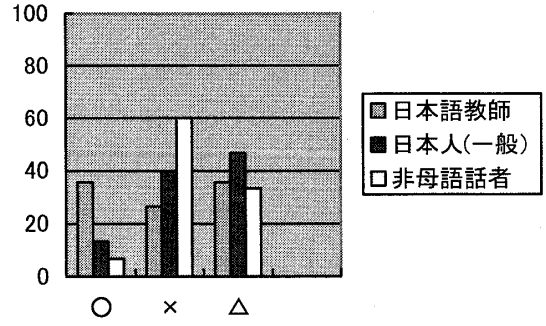
例３－１（問いかけ）「ええ」



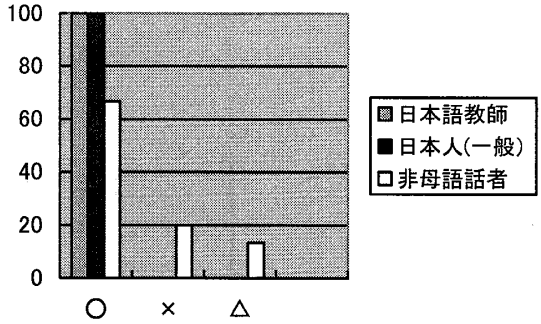
例３－２（問いかけ＋許可を求める）「はい」



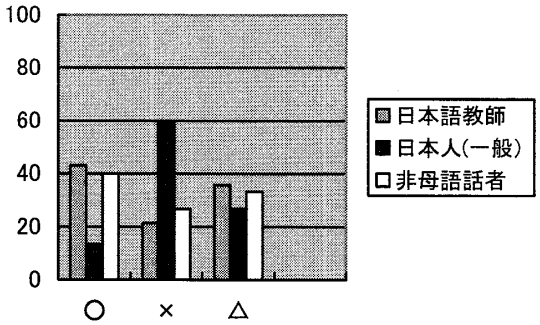
例３－２（問いかけ＋許可を求める）「ええ」



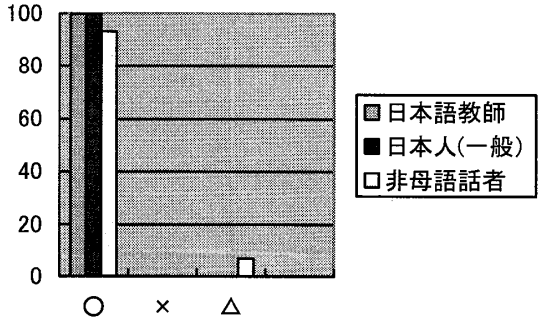
例４（インストラクション）「はい」



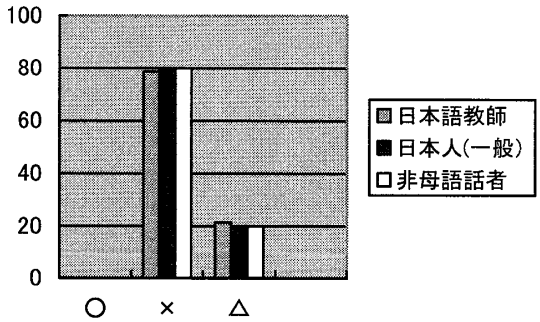
例４（インストラクション）「ええ」



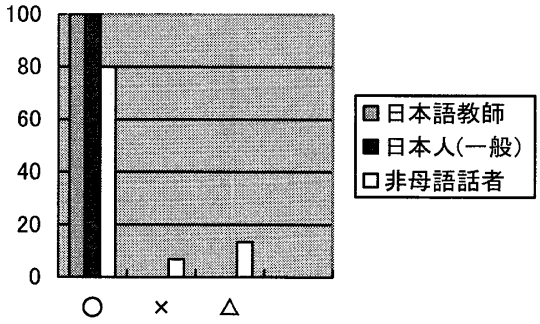
例５（教師が学生に注意する）「はい」



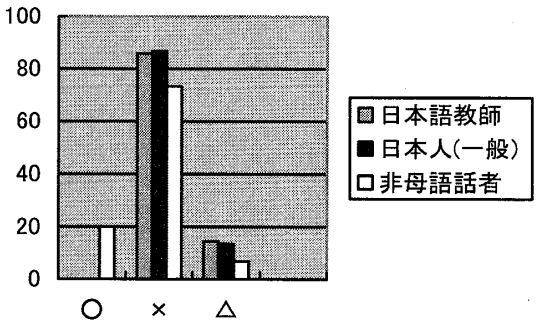
例５（教師が学生に注意する）「ええ」



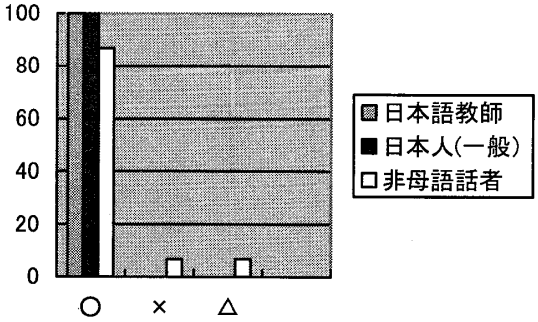
例６（映画館の窓口）「はい」



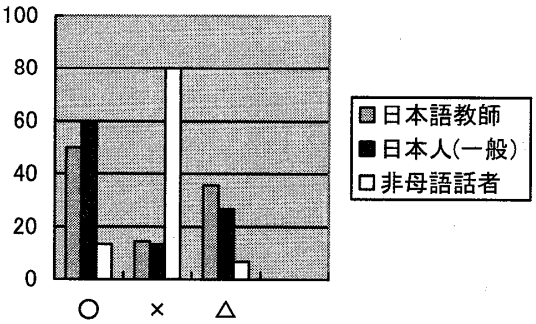
例６（映画館の窓口）「ええ」



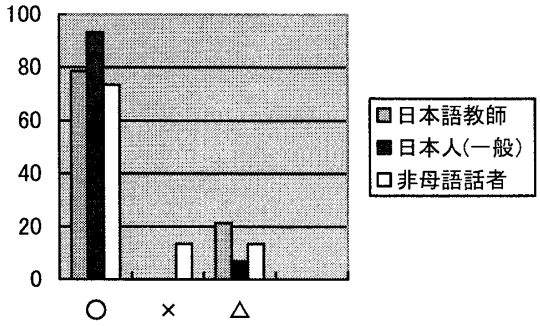
例７－１（デパートの店員と客）「はい」



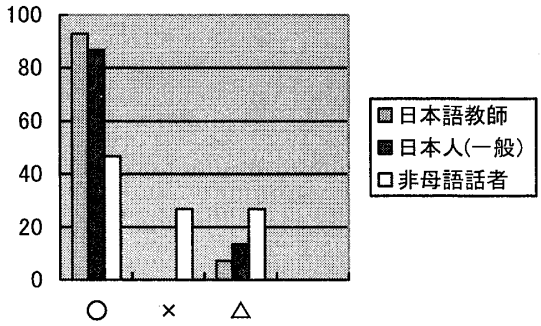
例７－１（デパートの店員と客）「ええ」



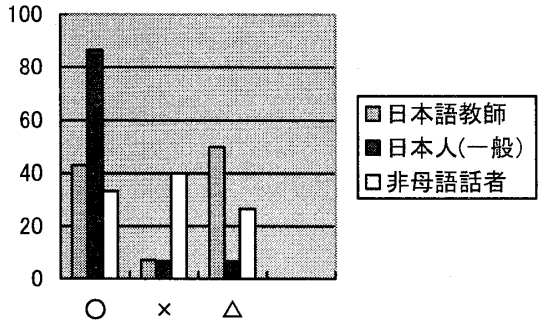
例７－２（デパートの客同士）「はい」



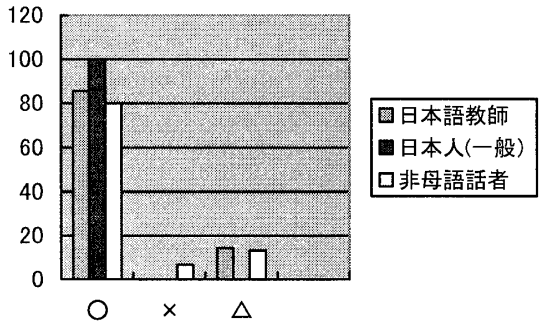
例７－２（デパートの客同士）「はい」



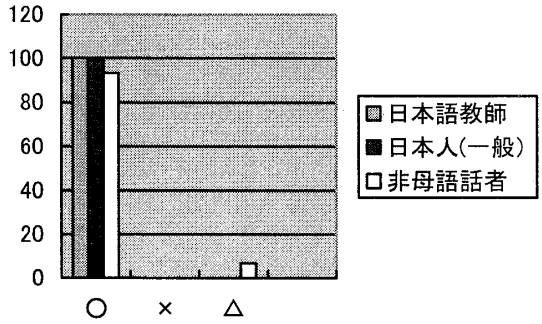
例８（第三者に関する話題）「はい」



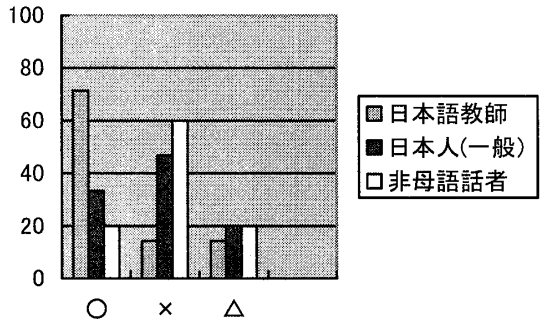
例８（第三者に関する話題）「はい」



例９（目上から目下に許可を求める）「はい」



例９（目上から目下に許可を求める）「はい」



資料４　質問Ⅱ～Ⅳの集計結果

質問Ⅱの集計結果（人数）

		A目上 B目下	A目下 B目上	AB 同等
例 10－1 真偽疑問文 「はい」	日本語教師	13	2	9
	日本人一般	14	5	8
	非母語話者	14	0	7
例 10－2 真偽疑問文 「ええ」	日本語教師	0	9	8
	日本人一般	4	13	12
	非母語話者	0	7	12
例 11－1 同意を求める 「はい」	日本語教師	7	0	4
	日本人一般	15	4	6
	非母語話者	15	0	7
例 11－2 同意を求める 「ええ」	日本語教師	7	6	8
	日本人一般	5	9	11
	非母語話者	1	12	11

質問Ⅱの集計結果（%）

		A目上 B目下	A目下 B目上	AB 同等
例 10－1 真偽疑問文 「はい」	日本語教師	92.9	14.3	64.3
	日本人一般	100	35.7	57.1
	非母語話者	100	0	50
例 10－2 真偽疑問文 「ええ」	日本語教師	0	60	53.3
	日本人一般	26.7	86.7	80
	非母語話者	0	46.7	80
例 11－1 同意を求める 「はい」	日本語教師	50	0	28.6
	日本人一般	100	26.7	40
	非母語話者	100	0	46.7
例 11－2 同意を求める 「ええ」	日本語教師	50	40	57.1
	日本人一般	33.3	60	73.3
	非母語話者	6.7	80	73.3

質問Ⅲの集計結果：「ええ」を使う頻度（人数）

	よく	ときどき	めったに	ぜんぜん	わからない
日本語教師	4	6	3	0	1
日本人一般	1	8	3	3	0
非母語話者	1	6	5	3	0

質問Ⅲの集計結果：「ええ」を使う頻度（%）

	よく	ときどき	めったに	ぜんぜん	わからない
日本語教師	28.6	42.9	21.4	0	7.1
日本人一般	6.7	53.3	20	20	0
非母語話者	6.7	40	33.3	20	0

質問Ⅳの集計結果：使い分けの要因（人数）

	相手との関係	場所場面状況	話題	自分の気持ち	性別	わからない
日本語教師	9	10	4	5	2	1
日本人一般	9	7	2	7	1	3
非母語話者	13	11	3	3	2	0

質問Ⅳの集計結果：使い分けの要因（%）

	相手との関係	場所場面状況	話題	自分の気持ち	性別	わからない
日本語教師	64.3	71.4	28.6	35.7	14.3	7.1
日本人一般	60	46.7	13.3	46.7	6.7	20
非母語話者	86.7	73.3	20	20	13.3	0

A Survey on the Difference in the Usage of "hai" and "ee"

Yasuko KANAYAMA, Rica NINOMIYA

This paper examines the difference in the usage of "hai" and "ee" between Japanese and non-Japanese speakers. Subjects are 29 Japanese (14 Japanese language instructors and 15 Japanese) and 15 non-Japanese speakers.

The results are as follows: (1) for the non-Japanese speakers, the honorific aspect is more influential in deciding whether to use "hai" or "ee" than it is for the Japanese speakers; (2) by using either "hai" or "ee," the Japanese as well as some non-Japanese speakers show an intention to control the distance between speakers; (3) compared to the Japanese speakers, the non-Japanese speakers show less of an intention to present their feelings, attitudes, and standpoints more actively; and (4) the non-Japanese speakers use "ee" less frequently than do the Japanese speakers.

The function of "ee" was further examined based on the research. As a result, we conclude that the "ee" has extensive functions and effects, which lead to diversity in the usage of "ee," especially among Japanese speakers.